

2006 立山登山マラニック

(2006年8月26日)

ゼッケンNo. 1213 山猫@滋賀

はじめに

過去2年参加した「立山登山マラニック」は私にとって外せない大会となった。それは大会もさることながら、日本最大級のアルペン観光地である立山の雄大な自然の中に観光気分の自分を置きたいとの思いが強いからである。室堂一帯を眺めていると人間のちっぽけさを感じてしまう。山は雄大で嫌なことを全て忘れさせてくれる。大会翌朝は早起きし、清々しい空気の立山連峰の姿を目の辺りにするとともにここに居たいという気分になってしまう。あれから1年、三度参加出来る喜びはひとしおだった。

前日

25日は年休を取った。朝8km弱走り、8月300kmに乗せることができ、気分良く富山に向かうことになった。10時過ぎの電車で富山に向かった。今年も青春18切符を使い、普通電車で富山まで行くことにした。長浜で乗り換えるとH間さんが横に来られた。H間さんも同じく青春18切符を往復使うとのこと。確か、大阪の南部の方なのでここまで来るだけでもだいぶ時間が掛かる。車内でいろいろ世間話をしながら、敦賀に向かった。

敦賀では昨年同様、元祖ソースかつ丼の店「ヨーロッパ軒・敦賀駅前店」に寄ることにした。敦賀には11時55分に着くが、次の12時41分福井行きに乗らなくてはならないので駅に着く手前で電話し、すぐに食べられるように「ソースかつ丼」をH間さんの分と2人分予約しておいた。8月5日に続いて今



月2回目のソースかつ丼だった。前回、他のお客さんの食べ方を見たので、カツ3枚を丼の裏蓋に置き、特製ソースがかけられたご飯にソースをかき混ぜて、カツを1枚毎にご飯の上に置いて食べた。この方がソースが良く混ざり、カツは香ばしくて美味しいのだ。ご飯の量は大き盛り並みだ。店の方に「先日、お見えになりましたね!」と言われ、「はい」と応える。あの時は徹夜で走った後だったので、なかなか食べられず、苦しい顔をしていたので、覚えて貰っていたのかもしれない。他の店員さんに滋賀から走って来たとも話していたし……。それが商売といえば、そうだが……。

その後、福井まで行く電車の中で隣に座られた若い女性の2人組の話し声を聞いているとガイドブックを見ながら、福井にあるヨーロッパ軒本店を目指しているようだった。ガイドブックの地図を広げながら「バスで行こうか?、タクシーで行こうか?、歩いて行けるかな?」などと会話されていた。



どのようにして店に行かれたかは知らないが、ここにもヨーロッパ軒を目指す人がいた。福井で乗り換えするとそのまま富山まで直通で行けるが、2時間50分掛かる。福井駅のホームでN谷さんを探したが、見当たらなかった。その後もH間さんとずっと一緒だったので寝ることができなかった。

金沢で若干の停止時間があり、N谷さんが顔を出して下さった。気が付かなかったが、乗られていて安心した。福井のヨーロッパ軒本店でソースかつ丼を食べたと話されていた。そのうち富山には16時36分に到着。「地鉄ホテル」で受付を済ます。「お世話になります」というと「O平さんですね」と何も見ないで応えて下さり、覚えて貰っていたのか?。前日にbabiさんからメールがあり、「お盆以降体調が優れず、不参加にします」との連絡を受けていたので、参加賞を受け取る。21時頃に到着予定のやまさんの受付も済ました。昨日夜に下痢で体調が悪いので参加しないかもしれないとの連絡を受けていたが、とり

あえず富山には行くと言われ、安心した。今日午後の会議が終わってから来られるので、大変だと思う。受付ではがっつくんと合流し、宿泊する「ホテル・コーホー」に向かう。昨年も泊まったが、外観より、内装は割りと綺麗な3670円の格安ホテルだ。もりけんさんの分も当初予約しておいたが、残念ながら参加は抽選で落ちられた。

翌朝早いので17時頃から、N谷さん、がっつくんの3人で駅前の居酒屋に行き、日本海の新鮮な幸を注文する。N谷さんとがっつくんはカキや白エビの活き造りを食べられていたが、私はその手の物は嫌いなので、食べられる物を頼んだ。しかも、下痢気味だったので、生物は食べないことにした。30分ほどすると枸杞さんから「今居る場所を教えて欲しい」と連絡があり、10分位すると顔を出して下さった。枸杞さんとは4ヶ月振りの再会だった。「車なので少しだけ」と言われて少しだけ同席され、席を立たれたが、N谷さんともがっつくんとも間接的には繋がっていた。ビールも喉に通りにくい。サンマの塩焼きとおでん、焼きおにぎりくらいしか食べられず、悪い予感がしてきた。



ホテルに戻ってからも腹の具合は今ひとつ。明日はどうなるのだろうか？。ゼッケンを付け、走る準備だけして、21時過ぎに寝たと思う。テレビを見ているとそのままウトウトしてしまったようだ。

当日朝

1時55分に目覚まし鳴り、熟睡の最中に起きなければならなかった。朝食のいなり寿司と巻き寿司、サラダを口にすると、冷えているせいもあるのか、なかなか喉を通らない。食べ終わった頃、トイレを催すと昨夜同様に下痢だった。その時は「何とかなるだろう」と軽い気持ちだった。エビオスと胃腸薬、ガスター20を飲む。着替えた後、2時40分に集合して、ホテルを出た。2時45分に富山駅前に着き、バスに乗り込む。昨年は余裕がなかったが、今年は少し早く出た分余裕がある。バスは3時に出発し、浜黒崎キャンプ場には3時半に到着した。

過去2年と比べて、やや気温が低くて涼しく感じる。一般の人ならかなりヒンヤリと感ずるのではないかと思う。フランケンさん、枸杞さん、W穂井さん、D口さん達と挨拶。今回のウェアは上着が昨年と同じフランクショーター半袖ウルトラシャツ、DeSotoのノースリーブも考えたが、下山後が寒いかもしれないので止めた。ランパンはDeSoto、シューズは底がかなり減ったサッカニーのAYA。新しく買ったばかりのカシオのデジカメ、500MLの保冷ボトル、今回は胃の調子が悪いので、胃腸薬、ガスター20、塩、エビオスも持参した。まだ真っ暗闇なので、小型の懐中電灯を借りる。



N谷さん、山崎さんと写真を撮り合おうとしているところで集合が掛かった。浜の波打ち際で日本海の海水に触れる。松原実行委員長の挨拶があり、それが終わると一斉にスタート。

大会道中

暗闇の中、4時より2分ほど早いスタートになっていた。キャンプ場内の歩道を通り、キャンプ場前の道路を横断、常願寺川西側の堤防を進む。一気に砂利道に変わり、走り難くなる。この時点でN谷さん、山崎さんはどこに居るかわからなくなっていた。私はできるだけペースを乱さないように進んだ。確かに堤防に入ってから気温は低そうに感じる。前半は下痢の影響も出ずに快調に走れたが、やはり汗の量はいつもと変わらなく多かった。気温が低いと体感しても朝の湿度は高く、風もない。昨年は富山テレビのラ

イトを付けた撮影クルーが近づいたり、離れたりにしてストレスを感じたが、今年は一歩だけ追い抜かれただけだった。今年は何をターゲットにしているのだろうか？。常願寺川沿いの堤防は一旦下って川を渡り、今度は反対側堤防に向かって坂を上らないといけない所が数回ある。

富山地鉄の踏切（7.4 km / 04 : 46）を渡り、やや左斜めに進んで堤防に出ると一旦砂利道は終わった。2分フライングスタートだったので昨年と同じタイムで来ていることになる。徐々に汗がランパンから濡だって、シューズ内にもだいが入り込んでいた。気持ち悪い。1時間経つと東の空が少し赤くなり始め、暑そうな予感がしてきた。「大日橋」では水のエイドがあり、かなりのスタッフの方々が応援に回られていた。水は少しだけ口にする。



北陸自動車道高架下を潜ると常願寺川が2つに別れており、右は用水路みたいだ。用水を渡って少しするとまた砂利道となった。東の空は立山の稜線にグレーの雲の隙間から朝日の紅色が綺麗に顔を出し始めていた。この頃、「早いですね」と声を掛けながらのがつつくに抜かされた。

その後、富山霊園付近からは真っ直ぐな舗装の堤防が続く。前の背の高い女性とほぼ同じペースで進むが、その前とはどんどん離れ、後ろからは抜かれることが多くなっていった。完全にペースダウン。毎年、この真っ直ぐな堤防は自分のペースを計るには格好の場所だが、年々失速度合いは加速する一方だ。前後の人の数も減り始めた。心拍数も上がっていると思う。堤防の上りでも今年は歩いていないが、その分無理しているのかもしれない。この頃、下痢のことは忘れていた。また昨年のようにリタイヤのことを考えている余裕もなかった。雷鳥大橋に差し掛かる手前で大きな声で「頑張れ、頑張れ！」と応援して下さる女性の姿があったが、苦しい時の頑張りは辛く感じる。それで歩きたい気持ちを精一杯抑えた。川の先の雄山神社大宮の鳥居が見えるか探すが、今年は何故か見えなかった？。東の山々の稜線から太陽が顔を出し始めた。暑くなる予感がする日の出だ。

その先の「雷鳥大橋」（16.8 km / 05 : 49）で常願寺川を渡り、東岸に出る。あと2 kmでエイドとの表示があった。雷鳥大橋の真ん中辺りで上流、下流を眺めて写真を撮る。写真を撮ることより、休



むことが目的だった。橋を渡り切るともう限界と左側の歩道を歩き始める。歩くことが大きなロスでないことは頭にインプットされているので、この辺りからの歩きは想定内の範囲だった。もう力が完全に抜けて走れなくなっていた。少し歩いているとクリーンセンターの横で一気に朝に食べた物を吐いてしまった。コーンやレタス、寿司などほとんど出てしまった。こんなに早く、前からも後ろからも噴射か、前に行く気力はどんどん失われていく。スタートした時の気持ちは打ち砕かれていた。この吐いたシーンをK田さんに見られた模様だ。ボトルのスポーツドリンクはもう無くなり、喉がだいぶ乾いていた。今年も堤防の歩道が長くなり、延長されたように思った。去年のように「頑張って下さい」と声を掛けてくれるランナーは居なかった。少し先の車止めのガードレールを越えると多くのスタッフが待ち構えられていた。ここでフランケンさん、枸杞さんに抜かされる。



県道を横断し、地鉄の踏切を越えると漸く『雄山神社大宮（前立社壇）』のエイド（19.3 km / 06:09）に到着。おにぎりやパン、バナナが置かれていたが、全く食べたい気がしない。チョコレートと水を3個ほどと水を少し頂いた。ここで間寛平ではないが「止まると走れなくなる」と言いながら、エイドでもその場で足を上下しているランナーがいた。元気といえば元気、無駄といえば無駄、人のことはどうでも良いけれど、こんなところでこの行動はエネルギーの使い過ぎではないか。地鉄と並行に走る立山橋を渡ると今度は常願寺川の西側を進むことになる。ここからは上りが待っている。最初は少し走ったが、そのうち歩き出す。その先の道端にサントリーの自販機があるので給水しようと急ぐ。自販機はコースから10mほど逸れた会社の前にあったが、大回りしなくてはならず、えらく迂回したように思えた。スポーツドリンクとヨーグルトを買う。DAKARAは保冷ボトルに入れた。それなら立山橋を渡ったところにある過去2年寄っていたコカコーラの自販機で買った方が良かったと嘆く。

自販機に寄っている間に前後にいたランナーは遙か前を進んでいた。どんどん後方に下がって行く自分の姿があった。緩い下りに変わったので気分一新して走ろうとするが少し走ったところで、身体がいうことを効かなくなる。もう完全にグロッキー状態で歩きに変わっていた。「ここから称名エイドまで歩いても10時半には着けるだろう」が頭を過ぎる。時々走ろうともしたが、前に行こうとする力が沸いてこない。もう駄目だ。「走るのを止めて、歩くことに専念しよう」に切り替えた。21km付近まで進むと私設エイドを開いて下さっていた。梨を3切れとパイナップル1切れを頂いた。夏場のマラソンに水分の多い梨は有り難い。この辺りから左側が開けて常願寺川、その向こうに田園風景、山々が見えてくる。これから立山を目指すのだという気持ちが高まるころだ。しかし、私には気持ちの高揚はなかった。私設エイドから1kmも進まないうちに、また私設エイドが見えてきた。



ここではお茶を頂いた。この2つのエイドは昨年なかただけに有り難い。後続にどんどん抜かされながらも頑張る。ダムが見えてきた。遙か彼方には幾重にも山々の姿が望めた。



岡田集落の外れでは大好きなダイドーアイスココアを自販機で飲む。その先も小刻みなアップダウンの中、ひたすら歩く。この時、バイクの給水車が横を通り掛かった。私のすぐ前を走っていたランナーに「給水如何ですか？」と尋ねられたら、「結構です」と応えられた。私にも聞いて欲しかった。当然「欲しいです」と応えたのに・・・。暑くなってきたのに、みんなそんなに給水の必要がないのか、私が単なる水分欲求異常だけなのか？と自問自答する。去年は走り中心の中に歩きがあったのに、と思いつながら走れない自分が悔しい。



松木の集落に入ったところで旧家のような立派な民家を探したが、見逃してしまったようだ。この辺りでT内さんに抜かれた。「前回の立山は悪天候で室堂ゴールだったので、今年は何としても雄山ゴールしたい」と話され、先週はトランスエゾを走って来られたそう。T内さんにとって何回目のトランスエゾだったのだろうか？「昨日、富山市内を暑い中、散策ランしたのが応えた」と話されたが、何キロくらい走られたのだろうか？2001年、初めてのさくら道で兼六園から夢遊病者状態に陥り、先のややこしいコースが地図を見ても全くわからず、必死でT内さんとY原さんに付いて行き、ゴールできたあの日のことを思い出す。あれから5年経った。この日はT内さんに、4月のそれぞれのさくら道ではY原さんにお

会いできたことはラッキーだった。

その先の牧集落では民家の前に湧き水が出ていたので、T内さんと顔を洗って、飲んだ。飲む前に横にバスが止まり、「どこをスタートしたの？」と聞かれ「浜黒崎から」と応えると「どこがゴール？」とまた聞かれ、「雄山山頂」と応えると「ご苦労様！」と笑いながら言われた。T内さんは元気が出たのか、ゆっくりだが、走り出された。その先は下りに変わったので少し走り出したが、また歩く。大きなカーブでサングラス姿の女性が追いついて来た。「E角さんですか？」と尋ねると「はい」と返ってきた。「今年のビデオ見ましたよ」と言って少し話をしながら、一緒に走った。今年は調子が良いようだ。小口川の橋を渡ったところで上りに変わり、E角さんは先に進まれた。

再び、常願寺川が見え初めた。山々や木々の緑と川の白い石のコントラストが何ともいえない味わいを引き出している。少し進んだところでY字路があった。昨年ま



では左側に行き、殺風景な野原のようなところを進んだが、今年の矢印は右側になっていた。ここを通ると少し大回りになるが、旧街道のような雰囲気があり、良い感じだった。軒先に水道の蛇口のある家が多く、冷たい水が飲めるのだらうと思いつつも飲むことはなかった。本当は飲みたかったが。その先の道角でスタッフがランナーを待ち疲れている様子だった。小口川を渡った少し先からは誰とも会っていない。

和田川を渡った小見T字路エイド（30.1km/07:48）は温水だけだったので、パスさせて貰った。

その先には短い急坂があり、上り切ると常願寺川に掛かる「芳見橋」がある。事故で亡くなった方が居るのか、花束が飾られていた。上流の水は少ないが、堰が幾つか見え、大きな石がゴロゴロ転がっていた。



下流は橋を隔てて全く違う川に見える、地鉄の陸橋も見える。信号のあるT字路の角にあるガソリンスタンドに入り、缶コーヒーを買う。その後すぐにトイレに駆け込んだ。下痢だ。一度トイレを出たが、再度駆け込む。最悪のシナリオになった。10分くらいトイレに入り、コーヒーを飲んで出発。後々にわ

かったことだが、この時にやまさんに抜かれたようだ。ガソリンスタンドを出ると長い上りが待ち構えているので必死で歩く。ここは芦峯寺の集落だ。ここは歩道がなく、路肩が狭い。車が結構多く、観光バスの数も多かった。もう全く誰の姿も前後に見当たらない。最終ランナーの気分だ。

『雄山神社中宮祈願殿』手前では自販機に寄り、ダイドーのMIUとアスパラドリンクを買う。去年はこのすぐ先でエイドを開いて下さっていたが、今年は遅過ぎたのか、開かれていなかったのかわからないが、無かった。雄山神社中宮祈願殿の横には山をもじった「立山博物館」があった。昨年までは全く気が



付かなかったが、一瞬、宗教団体の建物のように思えた。その先には石垣にコケの生えた山寺のような山門のお寺があった。落ち着いた雰囲気のお寺だ。少し行くと緩い下りになったのでゆっくりと走った。右側歩道にはスタッフの姿が見えるが、道路を横断して左側の山手の湧き水に向かう。顔を洗うと気持ち良い。再び道路を横断して歩道に戻って、スタッフの方に「最終ランナーですか？」と尋ねると「わからない？」と応えられた。ここで県道6号線と67号線の分岐の大きな看板3枚が頭上に掲げられていた。ここを真っ直ぐに進むとそのまま称名滝方面に行けるが、ここからは右折して67号線方面を立山駅に向かう形になる。



立山大橋入口 (33.6 km / 08:29)。昨年は大勢のスタッフから名前を呼ばれたが、今年はほとんど最終ランナーに近いので、悲しいかな名前はおろか、応援どころの雰囲気ではなかった。眼下の称名川を見ながら、「立山大橋」を渡る。大会で前後に誰も居ないのは何故か寂しく感じる。雄大な立山大橋を渡ると厳しい上りが待っていた。ここは陽を遮るものがなく、非常に暑い。道路右側で水



の流れる音がするので手に触れると生温い水でアイシングは無理だった。「立山国際ホテル」まで来るとようやく上りが終わり、少しの間下りになる。右側にはやまさんがスキー1級の試験を受けたという「極楽坂スキー場」の緑のゲレンデが見える。宿泊施設も何カ所かあった。歩道は終わり、狭い路肩の緩い上りを進んで行くとT字路が見え、スタッフの姿が4、5人見える。右のゲレンデは「雷鳥バレースキー場」だ。



スタッフに「左折して、この先2 km行けばエイドです」と教えて貰うが、尻の方がやばくなりそうな予感がしたので「下痢なんです、トイレはありませんか？」と尋ねると「この辺りはスキー場なので、何もないですね。立山駅まで行けばありますので、辛抱して下さい」と言われる。何とかなるかと気楽に構えて歩く。左折してからは歩道があったのでそこを進む。しばらくして、歩道が車道と別れ、歩道のみ道路頭上に上がるところがあった。そこにスタッフ1名の姿があり、ここからは下りになる。その瞬間辺りから、下痢の兆候がもはや止められない気配になり、尻を押さえながら必死で走って下る。左は川の崖っぺち、右は入ることもできない山、タイミング良くその先には頭上にあった歩道が車道と合流していたので必死で走り、頭上の歩道を逆向きに進んだ。山にも柵があり、入り込めない。下を走るランナーか



らは見えないだろうと座り込むと真下からは見えないが、左右から来る車からは丸見えだ。そんなことに構ってられる状態ではない。

超特急並みのスピードで噴射した。予めティッシュは持っているので安心だったが、神聖な立山に向かってる最中、汚物と白い紙が風紀を乱した気分が陥った。この先は下っているが、ただただ歩いて進む。「真川大橋」が見え、間もなく立山駅エイドだ。眼下の称名川の石や砂は真っ白に近いものばかりだった。立山駅のすぐ手前で地鉄の黄色と緑の色鮮やかな電車が通り過ぎた。



地鉄の踏切を渡ると『立山駅』エイド（37.9 km / 08:20）に到着。ほとんどのランナーは通り過ぎていたので、エイドは少しずつ片付けに入れつつあった。おにぎりや果物があったが、梨を2切れ頂いて、エイドを後にした。「水をボトルに入れましょうか？」と言って頂いたが、「中には冷えた水分を入れていきますので」とお断りした。「称名エイドの収容バスの出発時間は何時ですか？」とスタッフに聞くと「10時50分」と教えて貰ったのでこれは頑張ら進まない間に合わない。実際は十分に間に合ったのだが、疲れて時間の感覚がわからなかった。立山駅までは観光バスで来られるので大部分の観光の方々はこの先、ケーブルカーで美女平まで、その後は高原バスで室堂に行かれることになる。天気も良いので立山駅前には人で溢れていた。



く、身体全体を照すが空気は澄んで、左の山側から滝のような水の流れるとヒンヤリとした空気も時たま流れ込んで来て、気持ちよくしてくれる。この先、上り一辺倒が称名までは続く。下痢の心



配をしながらも、何とか称名まで持ち堪えて欲しいの一念だった。先ほど見えていた2人のランナーを抜かし、時間を気にしながらも必死の早歩きを続ける。時間が遅いので走る人は誰も居ない。等間隔にある称名川の堰を右に見ながら、強い日差しの中ではあるが、何と気持ち良い光景かと見とれ、写真を撮る。称名川対岸の遙か上を眺めるとヘアピンカーブを蛇行しながら上って行く立山有料道路が見える。凄い高さ、凄いカーブと上りだ。これを見ると立山登山マラニックの凄さがわかる。その頃にだいぶ前に抜かされたT内さんを抜かした。「疲

れた。もうビールを飲んでいいる」と笑顔で話された。

「今年もログハウス前で子供達は冷水エイドをして待っていてくれるのだろうか？。もう遅いので片づけが終わったかもしれないなあ」、そんなことを思いながら進んでいくとログハウスのレストラン兼住居の家が見え、そこで小学生の子供3人（男2人、女1人）が冷水エイドを用意して待っていてくれた。到着するとコップを差し出してくれた。冷たくて気持ち良い水だ。2杯頂いた。「ありがとう」と御礼を言って先に進んだ。子供達のエイドはほのぼのとして、辛い時のカンフル剤となってくれる。称名川に目をやると徐々に堰から落ちた水溜まりはコバルトブルーに変わっていった。どこも糸のような滝に見える。その先に立山有料道路ゲートが見えて来た。この左側には店があり、豊富な湧き水が出ている。これが冷たくて気持ち良いのだ。顔、手足に掛け、たっぷり飲んだ。前のランナーはウルトラ定番のビールを飲まれていた。

『ようこそ雲上の立山へ』と書かれた立山有料道路のゲート（41.8 km / 9 : 52）は「桂台」に



あり、標高663mの表示があった。立山駅から4kmで200m上がったことになる。感覚より上っていたみたいだ。真横にある自販機の前で今飲んだばかりの水を鉄砲魚の如く吐いた。かなり強烈だった。しかし、称名エイドまでは後3km弱。30分あまり歩けば到達できると安堵感に変わる。ここからは更に急な上りが続く。短い一部下り区間だけは走った。称名滝を目指す観光バスが横を通り過ぎて行く。後を振り向くとひとりだけ走りながら接近するランナーの姿があった。誰かわからない。写真を撮っていると近寄って来て「T島です。アメンボです」と言われ、最初ピンとこなかったが、フランケンさんの掲示板でお馴染みの方だった。初対面か、面識があるか、思い出せなかった。アメンボさんは走り歩きを繰り返しながら、力強く急坂を上って行かれた。急な上りとやや緩やかな上りの繰り返しが続く。右前方に「悪城の壁」が見え始めた。高さ300m、幅2kmにわたる一枚岩だ。

坂はさらに厳しくなり、13%の坂は洞門付近からあり、その後も続く。膝に手を置きながら、歩きたい心境だった。まさに舗装道路ながら、山登りと同じだ。「悪城の壁」が真横に見え、上の方がガスっていた。称名川第二発電所が見え、朱色の屋根には丸の中にHマークがあった、おそらく北陸電力のマークだろうと思う。更に洞門を越えると去年は見落とした13%勾配表示があった。強烈だ。ここをマウンテンバイクが大きく蛇行しながら上って行った。称名滝の駐車場案内が見え始め、左右に幾つかの駐車場が見えるとその先に称名エイドはある。今頃エイドに到着すると恥ずかしい気がする。エイドのテントが見え、「〇平さ



ん！」と大きな声でスタッフが声援して下さった。『称名レストハウスエイド』（44.7km/10:33）に到着。「もう関門、終わりましたよね」と尋ねると、サービスで先に行っても良いと言って貰えたが、下痢がいつ起こるかわからないので、リタイヤ宣言し、これで私の「2006年立山登山マラニック」は終結した。

リタイヤ、雄山頂上へ

ここでリタイヤすれば、室堂から雄山まではゆっくり登れるという安堵な気持ちになった。そうめんを頂き、冷たい湧き水で顔を洗い、口にする。バスは11時出発でスタッフは後片づけに入られていた。昨年のビデオで拝見したI上さんが約13分遅れでエイドに到着。今年は昨年より遅かったようだ。レスト



ハウス前で休憩していると後から着かれたT内さんが缶ビールを飲まれていた。すると隣で缶ビールを飲まれていた女性が「ビール飲みませんか？」と私に下さった。まだ半分以上入っていた。ゼッケンを取り外して収容バスに乗り込み、ビールを飲みながら、観光気分で室堂に向かった。



一旦バックして、立山有料道路ゲートから弘法までの距離は長かった。そして、称名滝を見ることはできなかった。弘法に着くとエイドには10人余りの人沢山ができていた。弘法で女性ひとりだけ、ここから走ると言っただけでバスから降りられた。勇気ある方だと思う。弘法から、更に先へバスが進むと室堂を目指すランナー達の背中が迫ってくる。その場に自分が居ない寂しさと延々と続く、この苦しくて長い坂を上らなくても良い安堵感と同居し、複雑な思いで窓越しのランナー達の姿を見る。昨年同様に少しガスが掛かっているのだから走る方には楽だろうと思う。H間さんの姿もあった。一昨年、収容バスから応援

を貰い、どんな姿に見えているのだろうと想像していたが、今回は全く逆の立場からランナーを見ることが不思議だった。斜め前に座られていたK田さんという女性と話をする。「やまさんは途中まで一緒だったが、どこかではぐれ、前に行かれたか、後ろなのかかわからない」と話された。フランケンさんや枸杞さん、O沢さんもお存じで、去年はボランティアされたそうだが、今年は走ってみたいと思ったそうだ。今年は宮古島遠足を完走、過去フルは1回だけしか走られていないそうだ。窓越しに調子が悪いと言われていた枸杞さんだったが、元気に走られている姿があった。室堂に近づくに従って、ランナーの数が増え、皆さん早くてレベル高いと思った。

そして、雲が切れ、目の前に雄山の晴れ晴れとした綺麗な姿が迫って来た。室堂エイド手前にも大きな雪渓があった。室堂に着くや否や、バスに乗って居なかったやまさんのことが気になり、荷物から携帯を取り出してメールするが、送信不可だった。もしものことがなければ良いがと思いながら、エイドに寄るとまた下痢を催す。とりあえず、パンを持って、室堂バスターミナルのトイレに走る。パンを持って入ったものの、パンをトイレ内で落としてしまう。エイドに戻るにはバックしなければならないので、そのまま石畳を通過して、一の越に向かうことにした。エイドで楽しみにしていたお粥を頂くことはできなかった。

石畳をT内さん、福岡の中平さんの後をついて進む。右前に雪渓があり、雪に触れるために観光客が足を運んでいた。ホテル立山付近は人でごった返している。緑の草原の向こうに見える立山連峰は雪渓があちこちに残っており、一昨年、昨年とは違った素晴らしい写真のような景観だ。真正面の茶色の施設にはテレビで見た富山県警山岳警備隊の室堂派出所もある。至る所に雪渓が見え、緑に白い雪が映える。今年は登山者、観光客が多い。

その内、関門通過できず、バスで室堂まで来られたI上さんと話をしながら、上って行く。I上さんは



今年、萩往還140kmに参加されたが、時間が足りなかったと話されていた。目をキョロキョロさせながら、この世の楽園のような室堂の景色、雪渓を見ながらゆっくり上って行く。ゴールして降りて来るランナーもいれば、これから山頂を目指すランナーもいる。ゴールを目指す人には道を開けた。そのうち、ひとつめの雪渓を通らなくてはならなかったが、上りで距離が短かったため、すんなりと通れた。少し進むと今度は距離の長い雪渓があったが、上りなので苦もなく進むことができた。だいぶ小さかったが、昨年あった雪渓はこの場所だと思う。雪渓を越えたところでゼッケン無しだが、I上さんと写真を撮って賞



った。一の越への急な石畳を苦しみながら上って行く。室堂から一の越までは2.4kmで250m上らなければならない。この辺りの急坂はこの苦しみから、15%近くありそうだ。上れば上るほど雪渓群の多さが目に付く。この立山の姿を見れば、今年の豪雪の凄さを物語っていると思う。

苦しんだ末にようやく2700mの「一の越」に到着。13時2分だった。ゆっくり歩いたつもりだが、45分で来られた。水を一杯頂く。またまた下痢を催した。トイレが目の前があるので急ぎ足で飛び込む。改めて称名エイドで止めたことは正解だったと思った。トイレから出るとI上さんの姿はなかった。遠くから眺めると雄山は途中で





等間隔に2箇所勾配が緩やかになるところがある。雄山頂上まで下痢は持って欲しいとの思いを込めて山登りに入る。AYAの底が減っているので、滑らないように注意して一步一步駆け登る。

少し登ったところで、下山中の視覚障害者の方を伴走されている方から「OOひらさん～」と声を

掛けて頂いた。思わず上を見るとムーミンさんだった。瞬間のすれ違いだったが、お会いできて嬉しかった。「M本さんは？」と尋ねると「少し後ろです」と応えて下さった。視覚障害者全国交流登山富山大会が室堂で行われ、雄山登頂もコースに入っているとふきこさんから聞いていたのが幸いだった。少し上ると滋賀のN部さんから声を掛けて貰った。N部さんと知り合えたのもこの立山で同室になってからだ。

13時過ぎだった。雄山山頂に向かうに従って室堂の景観が素晴らしく、今年の雪渓の多さが手に取るようにわかった。更に登って行くとM本さんの黄色の帽子が見え



たので「M本さ～ん、M本さ～ん」と声を掛ける。しかし、気が付いた時は少し離れていて、しかも私より下まで進まれていたので声は届かなかったようだ。一声も聞けなかったことは残念だった。さくら道といい、立山といい、M本さんとは1年に1度しか会えない七夕のような感じがする。これは2003年のさくら道でM本さんから聞いた言葉だ。



下山者が多く、その中には子供連れも多いので、気を付けて進んだ。するとO沢さんが下山して来られた。ウエアはスタート時と違って、上下共に着替えられていたが、初対面ながら、ゼッケン番号が10番違いだったのと何となく雰囲気 でわかった。「OOひらです。トップでゴールですか?」「はい」と当然の如く言われた。O沢さんのゴールタイムは8時間弱くらいのようなのだ。富士登山競争でも5位に入られているので、当然といえば当然だ。今の時間は13時40分、山頂でかなりゆっくりされていたようだ。

下から登ってくるランナーにコースを譲りながら、ゆっくり進み、いっぱい休んで山頂を目指す。ランナーも下山者が目立つようになってきた。頭上を眺めると雄山山頂の山小屋が見えているので山頂も近い。2/3くらいまで来たところでかなり平坦に思えるほど勾配の緩いところがあるので、ここでしっかり休み、回りの風景を眺めた。胃の部分がプクツ～と出て、ガスが溜まっているような感じで気持ち悪い。ここから山頂まではもう少しだ。一の越方面の山も谷になっている部分には雪渓で被われて鮮や





かだ。岩に腰を下ろして何回も休みながら、14時前ようやく山頂に辿り着くことができた。さすがにグロッキーになっていた。途中で抜かしたI上さんも登頂される。温かいコーンスープを頂き、しばし椅子に座って休む。動けないくらい身体力が抜けた感じだ。胃の中が空っぽになるとこんなにも力が抜けるのか。このままずっと座り込んでいたい気分で大パノラマに浸っていた。今度はポタージュスープも頂く。



陽の当たらない室堂の反対側は雪渓に被われ、華やかな室堂の陽に対して、絶壁で震えさえ感じさせる陰といった感じだ。リタイヤ者でもご祈祷して貰えると聞き、3003mの社まで上がる。混んでいたの、時間待ちがあった。いつもながら、足を滑らせれば断崖絶壁で即死するところ、ここが一番怖いところだ。ご祈祷をして頂き、御神酒も頂く。ここで神奈川のO森さんと顔を合らし、写真を撮る。O森さんは滋賀の湖北出身の方だ。ゴール地点に戻るとフランケンさん、枸杞さんもゴールされていた。一緒に写真を撮って貰う。H間さん、N谷さんもゴール。先ほどよりは少し回復したように思える。トイレに行こうか、どうしようか迷っている内に下山することにした。下山し始めた頃にゴール直前のK田さんとばったり会い、下痢していること、S谷さんのことなどを話す。コールされているのに、止めてしまったようで申し訳なかった。更に降りて行くとD口さんとすれ違い、リタイヤしたことを告げるとびっくりされていた。



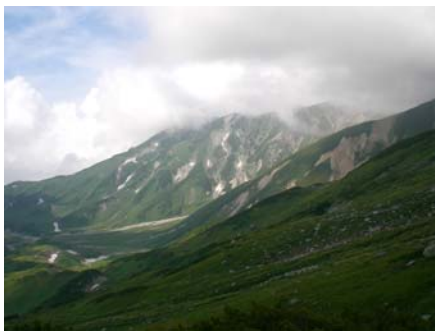
前で下山される方とのタイミングが合わず、ブレーキばかり掛けながらの下山となり、バランスを崩すことが度々あった。前が開いて、すんなり降りられるようになって油断したのか、尻餅を付いた。シューズの底が減っていると下山時は要注意だ。右手小指の元から血がにじみ、足にも傷ができた。山は一步間違えば、大変なことになることを実感した。その先でゼッケンを付けたやまさんとばったり。驚きのひと言だった。とてもここまで来られると思っていなかった。いつ抜かされたのか？、記憶にない。ただ「何という精神力のある人なんだ！」と驚嘆するだけだった。ただただ頭が下がる。木曜日夜、体調不良で富

山に行けないかもしれないと連絡を貰い、そんな体調の中、金曜日は夜遅くに着いて、超睡眠不足の中、何がそこまでさせるのか？。その時に早くに諦めた自分自身の情けなさを自分に対して叱った。

一の越まで降りるとO沢さんとバスで話したK田さんも下山される場所だった。K田さんは一の越まで来られたのかもしれない。急な下りの石畳を下って行く。石畳は砂が混じっていると滑り易くなる。気



を付けないとまた滑る。上りと違って下っていくのは楽だ。上る時と違って、時間的に下山者の数は少なくなっていた。そして、大きな方の雪渓に差し掛かった。上りと下りに足場が別れていたの、下り側に行くくと滑り易く、最後が急な下りになっていたの、無理と判断して、上り側の足場に移った。何せシューズの底はツルツル状態なので、余計に神経を使う。行きはこんなに滑らなかったのに、帰りになると滑り易くなっていた。そのまま尻を滑らせて、ソリのように降りて行くランナーの姿もあったが、雪の斜面を両手で押さえながら、カニ歩きで下ると何とか雪渓から脱出できた。雪渓の下は大きな岩がゴロゴロ転



がっていて、短くても雪渓部分で滑ると命に関わると強く感じた。2つ目の雪渓はすんなりと通ることができた。危険な部分を終え、これから室堂バスターミナルまでは石畳の中を進めば良いだけ。脇を見れば雪解け水が気持ち良く流れていた。飲みたいくらいだ。急にガスに覆われたり、切れたり、陽が差したり、雲に隠れたりして都度、形を変える山々の姿に圧倒されながら歩く。全く別世界にいるみたいだった。





雷鳥荘にて

ホテル立山に戻り、トイレを催したので行ってみると下痢ではなく、ガスの連発だった。これで下痢は収まったのではないかと思えた。そこから室堂エイドにある荷物を持って、雷鳥荘に向かう事になる。室堂エイドに戻ったのは16時過ぎだった。ここから雷鳥荘まではすんなり行って30分掛かる。ホテル立山横では雄山一帯を撮るには最も景観の良い場所といわれるところで写真を撮る。「ミクリガ池」でも脇に雪



溪があった。写真を撮るにいい撮りながらだったので、雷鳥荘に着いたのは16時40分を過ぎていた。部屋割りを確認し、312号室に行くのとN部さんの姿があった。4人部屋だ。この方がいい。食事は18時半からだったので、硫黄泉に浸かり、疲れを癒すことにした。ここは源泉のすぐ上なので当然源泉100%。内風呂も、木の展望風呂も熱くて熱くて、長居できなかつた。それに洗い場も順番待ち状態。水が冷たいので汗をかかないようにし、アイシングに努めた。N谷さん、6時半前ぎりぎりにやまさんも部屋に入られたので4人で食事に行く。

最初、食べられないのではないかと思ったが、トンカツと魚は食べられた。出ている物の半分くらいしか食べられなかったが、胃の中に入れて安心して。しかし、味覚はあまり感じられなかった。また、ビールを飲みたい気分にもならなかった。食事後、400円する缶ビールを買って、居眠りしながら飲んだが、1本空けるのに30分以上掛かったと思う。8時から完走パーティがあり、再び食堂に行くと去年同様に立食方式だった。フランケンさん、枸杞さん、K田さん、波多ママ達と同じグループで歓談したが、やはりビールを飲みたい気分にはなれず、結構立っているのが辛かった。お腹の影響はここでも出てきた。波多ママの隣で話されていた小柄な女性は昨年1位、今年2位の千葉のF川さんで、私が名前を言うと「名前は知っている」と言われて驚いた。G師匠と知り合いらしく、その筋から知って貰ったのだろう。8時半頃には部屋に戻り、



冬布団で寝る。虫が蛍光灯の回りに何匹も飛び回っていたが、すぐに寝られた。N谷さんは遅くまで、がつつくんやスタッフと飲まれていたようだ。

翌朝の雷鳥荘

翌朝は4時半頃に起きたかったが、目が覚めたのは5時。すぐに風呂に行くともう先客でいっぱいだった。奥の展望風呂に入り、冷水を掛けてすぐに上がった。その後、カメラを持って外の様子を伺い、今年も地獄谷に足を運んだ。夜間は通行禁止になるが、パトロールの方が鎖を外したので、そのまま「地獄谷」へ足を運ぶ。今年は温泉卵を蒸している人は居なかった。



ぐるっ〜と一周しようと思って最後の坂を上ろうとするとパトロールの方から「まだ6時になっていないので行かないで下さい」と止められた。時間は5時50分頃だった。2/3ほど来ていただけにがっかり。仕方がないので元来た遊歩道を引き返す。山の上部は綺麗にガスが掛かり、写真でいうボカシを入れたような感じになっていた。6時半頃からのバイキングの朝食は昨夜と比べて、かなり食べられるようになっていた。



7時過ぎに雷鳥荘を出て、ホテル立山に着いたのが7時50分前だった。「立山玉殿の湧水」をボトルに入れ、土産を買って、N谷さん、やまさんとバスに乗り込む。



室堂から帰路

9時前にバスは室堂バスターミナルを出発。立山有料道路から、山々を見ながら、凄いコースだなあと改めて思った。今年は立山駅に寄らなかったのも、予定通り11時に富山駅に到着。11時11分の雷鳥に余裕で間に合った。缶ビールのあてに富山名物「鱒寿司」を買ったが、なかなか喉に通らず、まだまだお腹の状態がじっくりしていないことを物語っていた。やまさんは敦賀で降りられたので、以降はひとりだった。京都には14時09分に着き、15時に帰れた。

最後に

トラブルがあって八郎坂から室堂はパスしたが、終わってみれば楽しい立山登山マラニックだった。収容バスに乗ったお陰で室堂に早く着け、その分ゆっくりと観光気分で雄山山頂往復ができた。やっぱり立山、室堂は最高だったに尽きる。こんな大パノラマを見られることの幸せ、これは言葉では言い表せない。今回は下痢に悩まされ、神経を使ったとはいえ、走力の衰えによる下降線、年々の汗噴出量増加曲線、悪いことがどんどん重なって苦しくなる一方だが、来年も参加して、雪辱を果たしたいとの思いはある、来年、新たな気持ちで再チャレンジだ。それにしても何も筋肉痛がないのが不思議。立山連峰に魅せられた素晴らしい3日間の立山登山マラニックはこうして幕を閉じた。